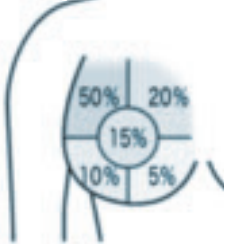


乳がん

(図2)



がんがしやすい
部位

- ・早期発見でほとんど治療できるがん。
- ・毎月行う自己検診で自分で発見できるがん。
- ・食事のとり方もかわり、40歳代でかかる人が多くなっています。
- ・検診は視触診とマンモグラフィ検査で確認します。

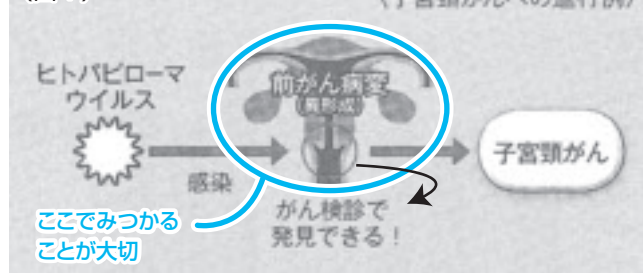
乳がんは、他のがんと違って、自分自身で発見できるがんです。生理の終わった1週間後に毎月自己検診を行うとよいでしょう。胸にしこりや、少しでも違和感を覚えたら、放置せず、すぐに受診しましょう。

乳がんの好発部位は、図2のように上部の外側になります。

乳がんの増加の背景には、食生活の変化(肉や乳製品等の高脂肪食品の増加)や女性ホルモンの分泌量・分泌期間が大きく関与していると考えられます。乳がんも、初期段階で適切な治療を行うことで、高い確率で治療できるといわれています。

子宮がん

(図1)



(財がん研究振興財団 かに38号より)

- ・予防ワクチン接種と検診で予防できます。
- ・30歳代に発症のピーク!
- ・ヒトパピローマウイルスによる感染が原因。
- ・検診は20歳以上が対象年齢になります。

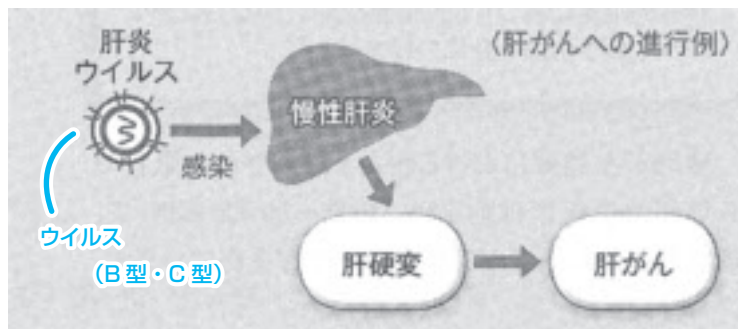
子宮頸がん予防のために、10代でのワクチン接種、20歳からの子宮がん検診・超音波検査、30歳からのピルの内服、更年期を迎えたらホルモン療法等、年代ごとの対応があります。

子宮頸がんは、自覚症状がほとんどありません。不正出血(生理以外の出血)で見つかる場合もあります。子宮頸がんの原因でもあるウイルスに感染して、がんに進行するまでには、数年から数十年かかるといわれています。前がん状態の早期に発見できるのが検診です。(図1)

肝がん

- ・沈黙の臓器と言われるほど、変化がわかりにくい肝臓のがん。
- ・肝がんの原因であるB型・C型ウイルスの有無を確認することから始まります。
- ・自分のウイルスのタイプと量を知り、定期通院で管理できます。

(財がん研究振興財団 かに38号より)



自分で取り組む肝がん予防としては、C型・B型肝炎ウイルス検査を受けることから始まります。肝がんの原因の多くは、ウイルスの感染によるものとなっています。ウイルスに感染し適切な治療を行わないまま放置すると、慢性化し、がんに進行することがあるからです。

自覚症状(足にむくみが出てくる、顔に血管が浮いてくる、こむら返り等)が出たときには、進行していることが多いので、定期的な通院により、肝臓の状態を血液検査(GPT/GOT・血小板等)・超音波検査を受けて管理することが大切です。

多久市では、この検査を平成2年から行っています。平成13年より前にC型肝炎の検査を受け、陽性・弱陽性の判定だった方は、検査基準が変わっていますので、再度検査を受けてください。インターフェロン治療は種類も増えて、通院治療でもできるようになり、さらに心配されていた副作用も軽減されています。また、陽性者の方で定期的な治療を行っていない方は、ぜひ治療を行ってください。

このインターフェロン治療については、治療費の助成制度を利用できます。24ページで確認してください。